

「はむらの道徳科授業指針」子どもの視点①

自分との関わりで道徳的価値を明確にする

道徳の授業では、子どもがねらいの根底にある道徳的価値（以下、「価値」という。）を自らのこととして捉え、生活に生かしていこうとする思いを培うことが大切です。そのため、子どもが自分との関わりで価値について理解を深めることが必要になります。

本号では、授業の流れに沿って、指導の主な観点を記します。

1 導入

- 「自分と関わりがありそうだ」、「学びがありそうだ」と思わせる短い説話や発問、写真や実物の提示等を行う。

<望ましくない例>

- ▲ 懺悔（ざんげ）で始まる導入 「今までに、困難にくじけてしまったことはありませんか。発表してください。」
- ▲ 執拗に問う導入 「礼儀の大切さを実感したことはありますか。」「それはいつですか」「どう思いましたか。」

2 展開

- 展開前半、自分と資料を重ね合せ、登場人物の言動等に注目しながら価値を追究させる。
- 展開後半又は終末で、資料を離れて自分との関わりで価値を捉えさせる。
 - ▲ 基本発問を多くしてしまい、子どもが価値との関わりで自己を見つめる時間を十分に確保できない。
 - ▲ 答えが一つに収束する閉じた発問や心情を問う発問を繰り返す、国語科の読むことの指導になってしまう。

3 終末

- 説話や書くこと、映像や音楽の視聴により、余韻や印象を残したまとめを行う。
 - ▲ 決意表明を強いたり、実践（行為）への意欲付けを行ってしまう。



教えること

哲学者 老子

人に魚を与えれば一日で食べてしまうが、人に釣りを教えれば一生食べていける

出典：「賢人たちに学ぶ 道を開く言葉」本田季伸著（かんき出版）

※ 教科の学習では、ただ答えを教えるのではなく、答えの導き出し方を主体的に学ばせることが肝要です。